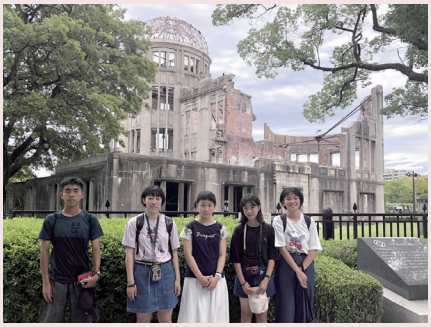

中学生広島平和教育研修

８月５日から７日まで、富士見中学校２年生５名が町の代表として広島市を訪れ、平和記念式典への参列や平和記念資料館見学、被爆された方のお話などから、戦争の悲惨さや平和の尊さを学びました。

参加者５名がこの研修を通して感じた平和への思いや決意を、今月から数回に分けて紹介します。

富士見中学校２年
寺尾（てらお） 友里（ゆり）

「原爆が残した傷跡と向き合う」

「ピカッ。」

一九四五年八月六日八時十五分。いつものように暑い夏の朝の光を浴びて、一日の活動が始まろうとする瞬間でした。一発の原子爆弾が広島に投下されました。

それから七十四年たった今年、平和について考えるために、私は広島平和研修に参加しました。広島平和記念式典に参列したり、被爆者の証言に耳を傾けたり、平和記念資料館を見学したりしました。原爆について五感で感じてみて、正直、自分では受け入れることができませんでした。広島に投下された原爆は、たった一発なのに広島のまちを一瞬で吹き飛ばしてしまう威力がありました。そして、多くの人々の生活や夢を奪ってしまいました。私にはそのことが信じられませんでした。

「あついよ。」「お母さんどこ。」「皮をはいで。」地獄のような光景が広がったそうです。広島は美しいまちから悲惨なまちへと姿を変えてしまいました。水を求めて川へ向かう人々。川の水はたちまち血の色で染まり、川の中は大やけどをおった人々でうめつくされたそうです。

「助けて。」と泣き叫ぶ子供やがれきにつぶされた腕から血がふき出している人、皮がむけ、骨がむき出して、全身真っ赤の状態で歩き回っている人がたくさんいたそうです。

こんな光景を、あなたは想像できるでしょうか。もし目の前にそのような光景が広がっていたら、目を背けたくなりませんか。私はそれらの写真を見ているのがつらくなりました。人の脂と思われる黒いしみが付着した服や黒こげになったお弁当箱。同時に原爆に対して強い怒りを覚えました。人々をこのように苦しめた原爆が許せなくなりました。でもここで、現実から目を背けてはいけないのです。現実と向き合って初めて、辛さ、悲しみ、苦しみが分かるのです。

広島はその後、放射線によって苦しめられました。やけどをおわず、健康に過ごしていた人々が次々と倒れていきました。気がつけば血を吐き、髪の毛が抜け、斑点がでました。白血病です。この時代、白血病を発症したら、一年も生きられなかったそうです。

被爆者の証言を聞くことができる、原爆被害者八・六証言のつどいに参加しました。田所明子さんという一号被爆者の方のお話をお聞きしました。田所さんは当時三歳でした。お父さんは県庁で働いていて、姉は学校に通っていました。家には田所さんと当時一歳の妹、そしてお母さんの三人がいました。八時十五分、原子爆弾が投下されました。父は爆心地に近かったため、翌日に死亡、姉はやけどをしました。家にいた田所さんたちは、その時は何も影響がありませんでした。しかし、月日を重ねるごとに三姉妹を原爆症がおそいました。何回もの手術を経て、今は健康でいますが、いつ再発するか分からないと言います。田所さん自身は若い頃、将来が不安だったと言っていました。自分の子供に影響しないか、病気にならないか、得体の知れない大きな不安があったそうです。そして田所さんの一番のつらさは、お父さんを亡くされたことです。「父親がいないことをずっと隠していた。」と語る田所さん。原爆にあわなかったら、小学校の教師になりたかったそうですが、その願いは原爆に奪われてしまいました。また、妹は、銀行に勤めようとしましたが、片親だったため、就職することができなかったそうです。田所さんたちの他にも、このようにつらい思いを抱えながら生きてこられた方が多くいます。原爆は、心に深い傷と、将来への不安を与えたのです。

あの日、一発の原子爆弾が人々に大きな影響を与えました。亡くなった方の中には、何が起きたか分からないまま、一瞬にして亡くなられた方、そして今になっても身元が分からない方がいます。亡くなった方が強く願った平和。被爆者全員が訴える核兵器廃絶。その思いを継ぐのは私たちです。今年、被爆者は十五万人をきりました。そんな中、私たちは現実と向き合っていかなければなりません。原爆が残した深い傷跡と向き合い、それを後世へと伝えていき、平和と核兵器廃絶を実現させる。それが私たちに与えられた使命なのではないでしょうか。